

ふるさとの山に向ひて・・・・

＝ 故きを温ねて想う ＝

初雪には思わず身をすくめてしまう。われら餓鬼の頃には「薪ストーブ」全盛だった。夏から秋にかけて校舎の周囲に、二つや四つに小割りされた薪が積まれて、適度に乾燥してあったのを、各学級の当番が、割り当てられた一抱え程の大きさのロープの輪に、ぎゅうぎゅう詰めて、やっこらさと膝まで積もった雪道を辿り、校内の教室まで運んだ事を思い出す。昼近くになると、室内も暖まるが、どうかすると、何人かが弁当を温めようと、ストーブの下とか周囲に置いたのが、じりじり音がしたり、漬物らしい匂いがし始め、誰の腹からともなく、微かにクークー悲鳴が聞こえ出した。あのほろ苦い記憶が懐かしい。

いま雪を戴いた美しい富士山が、今年、ついに名誉ある世界遺産に指定された。遙かに望む姿の美形は、まさに世界に誇れる。が、あれは眺める山であって、登る山ではないぞ、とも思う。故郷の岩手山の雄々しさも、誇っていいと、内心想っていたが、70歳を過ぎてから習い始めた詩吟の曲名に「岩手富士」を見つけ、胸が熱くなったので紹介したい。

みちのくに名山在り 岩手の峰 白髪凜然として 芙蓉に比す

ふるさとの山に向かいて 言うこと無し 故郷の山は ありがたきかな

そぞろに巡る 北上河畔の碑 故郷の歌は懐かし 涙 胸をうるおす

<渡辺 吟神>

この詩の中で、岩手山が芙蓉（富士山）に比べて勝るとも劣らない、と高評し、尊敬する啄木が、岩手山を賛仰して数多く詠んだのも当然かな、とばかりに引用している。

さて、古い先も短いせいか、昔日のあれこれが、何故かテレビを見るごとに触発され、思いでも様々であり、独りクスクス笑う事しばしばですが、精々、痴呆症にはならないように、目も耳も衰えない為の「熱海の会」を、弥生初旬、「別紙・記」のように実施したいと思います。楽しい日でありますよう多いに期待しております。

平成 25 年 師 走

幹 事 一 同